



TITLE:

Eigenfunction Expansions Associated with  
Second-Order Differential Equations for  
Hilbert Space-Valued Functions (散乱理論と  
その周辺研究会報告集)

AUTHOR(S):

斉藤, 義実

---

CITATION:

斉藤, 義実. Eigenfunction Expansions Associated with Second-Order Differential Equations for Hilbert Space-Valued Functions (散乱理論とその周辺研究会報告集). 数理解析研究所講究録 1970, 102: 24-40

ISSUE DATE:

1970-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/106292>

RIGHT:

Eigenfunction expansions associated with  
second-order differential equations for  
Hilbert space-valued functions.

京大 数研 斎藤義実

# § 0. Introduction.

微分作用素

$$(1) \quad -\frac{d^2}{dr^2} + A(r) \quad (r \geq 0)$$

を考えよう。ここに  $A(r)$  は Hilbert space  $H$  上で定義された有界自己共役作用素とし, (1) は  $H$ -valued function  $F(r)$  に作用するものと考える。  $r=0$  における境界条件として

$$(2) \quad BF'(0) - CF(0)$$

を考える。  $B, C$  も  $H$  上の有界自己共役作用素とする。作用素 (1)-(2) は  $\mathcal{H} = L_2(0, \infty; H)$  の作用素と考えることができる。

$H$  Weyl - M. H. Stone - E. C. Titchmarsh - K. Kodaira の一次元における一般展開定理の理論を抽象化することによって、作用素

(1) - (2) の固有関数展開を次のような形に行なうことができる:

$r \in [0, \infty)$  に対して "eigenoperator"  $\phi(r, \lambda)$  が存在して

$$\begin{cases} -\phi''(r, \lambda) + A(r)\phi(r, \lambda) = \lambda\phi(r, \lambda) \\ C\phi(0, \lambda) - B\phi'(0, \lambda) = 0 \end{cases} \quad (\lambda \in \mathbb{C})$$

をみたす.  $\phi(r, \lambda)$  は  $(r, \lambda)$  をとめるごとに  $H$  上の有界作用素である.  $L_0$  を微分作用素 (1) - (2) の一つの自己共役拡大としよう. このとき "the generalized Fourier space of  $L_0$ " である  $\mathcal{H}_\rho$  なる Hilbert space が存在して,

(A) "generalized Fourier transform"  $\mathcal{F}$  を

$$(\mathcal{F}F)(\mu) = \int_0^\infty \phi^*(r, \mu) F(r) dr$$

で定義すると,  $\mathcal{F}$  は  $\mathcal{H}$  から  $\mathcal{H}_\rho$  への unitary 変換となる.

$$(B) \begin{cases} E(\Delta) = \mathcal{F}^* C_\Delta \mathcal{F} & (C_\Delta \text{ は } \Delta \text{ の特性関数}) \\ L_0 = \mathcal{F}^* \mu \mathcal{F} \end{cases}$$

が成立する.

F. S. Rofe-Beketov [5] は同様の作用素に対して  $\mathcal{F}$  が (必ずしも unitary operator でなく) isometric operator となるような  $\mathcal{H}_\rho$  の存在を証明している. また Willi Jäger [2] は, non-negative definit self-adjoint の  $B(r)$  とある意味で  $C(r) \rightarrow 0$  ( $r \rightarrow \infty$ ) をみたす  $C(r)$  に対して  $-\frac{d^2}{dr^2} + B(r) + C(r)$  の固有関数展開を (本論の方法とは違う方法で行っている).

### § 7. 方程式 $(\frac{d^2}{dr^2} + A(r) - \lambda)F(r) = 0$

$H$  を可分な Hilbert 空間とする.  $(0, \infty)$  上の  $H$ -valued  $L_2$  関数のなす Hilbert 空間  $L_2(0, \infty; H)$  を  $\mathcal{H}$  と書くことにする. これらの Hilbert 空間のノルム, 内積は, 必要があれば,  $\|\cdot\|_H$ ,  $(\cdot, \cdot)_H$  のごとく添数をつけるが, 混同の恐れがない限り, 単に  $\|\cdot\|$ ,  $(\cdot, \cdot)$  で表わすことにする.

$B$  を  $H$  における有界線型作用素の全体とする. そして  $A(r)$  を  $[0, \infty)$  上の  $B$ -valued function とし, 次の仮定が満たされているものとする:

Assumption 1.1. (1)  $r \in [0, \infty)$  に対し,  $A(r)$  は  $H$  上の有界な自己共役作用素である.

(2) 任意の  $r \in [0, \infty)$  について

$$\int_0^r \|A(s)\|^2 ds < \infty, \quad (\|A(s)\| \text{ は } A(s) \text{ の operator norm}).$$

つまり  $\|A(s)\|^2$  は  $[0, \infty)$  で局所可積分である.

(3) 任意の  $r \in [0, \infty)$  に対して正数  $C_r$  が定まり

$$\int_0^r (A(s)F(s), F(s))_H ds \geq -C_r \int_0^r \|F(s)\|_H^2 ds$$

がすべての  $F \in \mathcal{H}$  に対して成立する.

以下方程式

$$(1.1) \quad \left(-\frac{d^2}{dr^2} + A(r) - \lambda\right) F(r) = 0$$

の初期値問題を考えるわけであるが、そのために次の定義を行おう：

Definition 1.1.  $u_0, v_0 \in H$  とした  $\lambda \in \mathbb{C}$  としよう.  $[0, \infty)$  上の  $H$ -valued function  $F(r)$  が次の条件 (1)~(5) をみたすとき,  $F(r)$  を (initial) data  $\{u_0, v_0\}$  に対する (1.1) の解であるという：

(1) weak derivative  $F'(r)$  が各実  $r$  で存在して,  $\|F'(r)\|_H$  は  $[0, \infty)$  上局所可積分である.

(2)  $[0, \infty)$  に含まれる任意の閉区間  $[\alpha, \beta]$  で  $F'(r)$  は weakly absolutely continuous.

(3)  $F'(r)$  は  $[0, \infty)$  上ほとんどいたるところ weak derivative  $F''(r)$  をもち,  $\|F''(r)\|_H$  は  $[0, \infty)$  上局所可積分.

(4) ほとんどいたるところ

$$-F''(r) + A(r)F(r) = \lambda F(r)$$

が成立し, しかも

$$(5) \quad \begin{cases} F(0) = u_0, \\ F'(0) = v_0. \end{cases}$$

が成立する.

Proposition 1.1. data  $\{u, v\}$  に対する (1.1) の解は unique に存在する.

証明は問題を積分方程式に変換して逐次近似法を用いればよい.

さて次に  $r=0$  において境界条件を考えるために,

Definition 1.2. (1) 初期値として

$$\begin{cases} F_1(0) = u \\ F_1'(0) = 0 \end{cases}, \quad \begin{cases} F_2(0) = 0 \\ F_2'(0) = v \end{cases}$$

をとった場合の解  $F_1, F_2$  によって作用素  $\phi_0(r, \lambda), \theta_0(r, \lambda)$  を導入する:

$$\phi_0(r, \lambda)u = F_1(r), \quad \theta_0(r, \lambda)v = F_2(r).$$

$\phi_0(r, \lambda), \phi_0'(r, \lambda), \theta_0(r, \lambda), \theta_0'(r, \lambda)$  などについて  $[0, \infty)$  上の  $B$ -valued function とし、 $\phi_0, \theta_0$  は operator-valued functions として (1.1) を満足する.

(2)  $H$  が二つの閉部分空間  $H_1, H_2$  によって直和に分解しているとする.  $H = H_1 \oplus H_2$ . そして  $B_2$  と  $C_2$  を  $H_2$  上で定義され、 $H_2$  内に値をとる有界自己共役作用素とする. しかも

$$B_2 C_2 = C_2 B_2,$$

が成立し、逆作用素  $B_2^{-1}$  が存在するとする。このとき、

$$B = \begin{cases} 0 & \text{on } H_1 \\ B_2 & \text{on } H_2 \end{cases}, \quad C = \begin{cases} \text{identity} & \text{on } H_1 \\ C_2 & \text{on } H_2 \end{cases}$$

とあって、 $B$ -valued function  $\Phi(r, \lambda)$  を

$$(1.2) \quad \Phi(r, \lambda) = \Phi_0(r, \lambda) B + \Theta_0(r, \lambda) C$$

で定義する。

Definition 1.2 から  $\Phi(r, \lambda)$  は  $r=0$  で境界条件

$$(1.3) \quad B\Phi'(0, \lambda) - C\Phi(0, \lambda) = 0$$

をみたすことがわかる。

## § 2. 作用素 $-\frac{d^2}{dr^2} + A(r)$

最初に  $\mathcal{H}$  の作用素として  $-\frac{d^2}{dr^2} + A(r)$  を定義するために必要の  $H$ -valued function に関する Green の公式を導入しよう。

Definition 2.1.  $[\alpha, \beta]$  を  $[0, \infty)$  に含まれる有界閉区間として  $\mathcal{H}[\alpha, \beta]$  を次の (1) ~ (3) をみたす  $H$ -valued function の全体とする：

- (1)  $F(r)$  は  $[\alpha, \beta]$  上 weakly differentiable で、 $\|F(r)\|_H \in L_1[\alpha, \beta]$ .

- (2)  $F'(r)$  is weakly absolutely continuous on  $[a, \beta]$ .  
 (3)  $F'(r)$  has a weak derivative  $F''(r)$  such that  $\|F''(r)\|_H \in L_1[a, \beta]$ .

Proposition 2.1.  $F_1, F_2 \in \mathcal{D}[a, \beta]$  とすると,

$$\int_a^\beta \{ (\mathcal{L}F_1(r), F_2(r))_H - (F_1(r), \mathcal{L}F_2(r))_H \} dr \\ = [F_1, F_2](\beta) - [F_1, F_2](a).$$

ここで,

$$\begin{cases} \mathcal{L}F_i(r) = -F_i''(r) + A(r)F_i(r) & (i=1, 2), \\ [F_1, F_2](r) = (F_1(r), F_2'(r))_H - (F_1'(r), F_2(r))_H. \end{cases}$$

Corollary 2.1.  $F_1 \in \mathcal{D}[a, \beta]$  とし,  $F_2$  は Definition 2.1 の (1)(2) を満たしているとする. このとき,

$$\int_a^\beta (\mathcal{L}F_1(r), F_2(r))_H dr = \int_a^\beta \{ (F_1'(r), F_2'(r))_H + (A(r)F_1(r), F_2(r))_H \} dr \\ - (F_1'(r), F_2(r))_H \Big|_a^\beta.$$

これらの Green の公式は  $\mathbb{R}^1$  の場合と同様に証明される. (すなわち  $F_i(r)$  が実関数で,  $A(r)$  も同じく実関数の場合).

次に differential operator  $-\frac{d^2}{dr^2} + A(r)$  を  $\mathcal{L}$  の operator として定



義しよう.

Definition 2.2.  $H$ -valued function  $F(r) \in \mathcal{D}$  とは,

(i) 任意の  $[0, \infty)$  に含まれる有界閉区間  $[\alpha, \beta]$  について,  $F \in \mathcal{D}[\alpha, \beta]$  が成立する.

(ii)  $B, C$  は Definition 1.2 で定義されたものとする.  $F(r)$  は境界条件  $CF(0) - BF'(0) = 0$  を満たす.

(iii)  $F(r) \in \mathcal{H}$ . また  $-F''(r) + A(r)F(r) \in \mathcal{H}$ .

このとき operator  $L$  を

$$\begin{cases} \mathcal{D}(L) = \mathcal{D} \\ LF(r) = -F''(r) + A(r)F(r) \end{cases}$$

で定義する. ( $\mathcal{D}(L)$  は  $L$  の定義域を意味するものとする).

このとき,

Theorem 2.1.  $L$  は closed operator である.

この Theorem 2.1 より  $L$  は、境界条件が与えられたとき、《maximal Sturm-Liouville operator》と考えることができる. 次節では  $L$  の ( $\mathcal{H}$  における) 自己共役制限を考察し, その固有関数展開を行なう.

## § 3. 固有関数展開.

§ 2 で定義した  $L$  の中における自己共役制限の一つを  $L_0$  としよう (このような自己共役制限は一般には無数にある) として  $E(\mu)$  を  $L_0$  の単位の分解とする.

まずこの節で用いられるある種の *vector-valued integral* の定義を写える.

Definition 3.1.  $[\mu_1, \mu_2]$  を  $\mathbb{R} = (-\infty, \infty)$  の有限区間であるとする.  $Q(\mu), \alpha(\mu)$  は  $[\mu_1, \mu_2]$  上で定義された  $B$ -valued functions とし,  $U(\mu)$  を  $[\mu_1, \mu_2]$  上で定義された  $H$ -valued function とする. 今  $\Delta$  を  $[\mu_1, \mu_2]$  の有限個の分割とする, すなわち

$$\Delta = \Delta(\eta_0, \eta_1, \dots, \eta_n),$$

ここに

$$\mu_1 = \eta_0 < \eta_1 < \eta_2 < \dots < \eta_n = \mu_2.$$

そして

$$\delta(\Delta) = \max_{i=0, \dots, n-1} (\eta_{i+1} - \eta_i)$$

とおく.

もし  $\eta_i \leq \eta'_i \leq \eta_{i+1}$  として

$$\lim_{\delta(\Delta) \rightarrow 0} \sum_{i=0}^{n-1} Q(\eta'_i) (\alpha(\eta_{i+1}) - \alpha(\eta_i)) U(\eta_i) \quad \text{又は} \quad \lim_{\delta(\Delta) \rightarrow 0} \sum_{i=0}^{n-1} Q(\eta_i) (U(\eta_{i+1}) - U(\eta_i))$$

が  $\eta'_i$  のとりかたや分割のしかたに無関係に  $H$  の弱位相の意味で収束するならば, その *limit* を

$$\int_{\mu_1}^{\mu_2} Q(\mu) \alpha(d\mu) U(\mu) \quad \text{又は} \quad \int_{\mu_1}^{\mu_2} Q(\mu) \bar{U}(d\mu)$$

と書くことにする.

単位の分解  $E(\mu)$  と §1 で定義された  $\Phi(r, \lambda)$  とは次のように関係付けられる.

Proposition 3.1.  $F \in \mathcal{F}$ ,  $I = [\mu_1, \mu_2]$  とする. このとき

$$(3.1) \quad F(r, I) = \int_{\mu_1}^{\mu_2} \Phi(r, \mu) (P_1 F'(0, d\mu) + B_2^{-1} P_2 F(0, d\mu)).$$

ここで

$$F(r, I) = E(I)F(r) = (E(\mu_2) - E(\mu_1))F(r),$$

$$F(0, \mu) = E(\mu)F(0), \quad F'(0, \mu) = (E(\mu)F)'(0).$$

また  $P_1, P_2$  は Definition 1.2 の  $H_1, H_2$  の射影作用素であり,  $B_2^{-1}$  も Definition 1.2 で定義された通りである.

証明は, (3.1) の両辺が微分積分方程式

$$L U(r, \lambda) = \int_0^\lambda \mu d U(r, \mu)$$

を満たし,  $r=0$  における初期値も一致することを用いる.

Definition 3.2.  $I = [\mu_1, \mu_2]$  とする. このとき  $H$  の中に値をもつ  $\mathcal{F}$  上で定義された線型作用素  $\mathcal{E}(I)$  を

$$\xi(I)F = P_1 F'(0, I) + B_2^{-1} P_2 F(0, I)$$

で定義する.

単位の分解  $E(\mu)$  の性質と *closed graph theorem* を用いて、次のような  $\xi(I)$  の性質が成立する.

Proposition 3.2.  $\xi(I)$  は  $\mathcal{H}$  上で定義された有界作用素であり、したがって  $\xi^*(I)$  は  $H$  上で定義された  $\mathcal{H}$  内に値をもつ有界作用素である。そして  $I_1 = (\mu_1, \mu_2]$ ,  $I_2 = (\chi_1, \chi_2]$  とするとき,

$$(3.2) \quad \begin{cases} \text{(i)} & \xi(I_1 \cup I_2) = \xi(I_1) + \xi(I_2) \\ & \xi^*(I_1 \cup I_2) = \xi^*(I_1) + \xi^*(I_2) \end{cases} \quad (I_1 \cap I_2 = \emptyset \text{ として})$$

$$(3.3) \quad \begin{cases} \text{(ii)} & E(I_1) \xi^*(I_2) = \xi^*(I_1 \cap I_2) \\ & \xi(I_2) E(I_1) = \xi(I_1 \cap I_2) \end{cases}$$

$$\text{(iii)} \quad \xi(I_1) \xi^*(I_2) = \xi(I_1 \cap I_2) \xi^*(I_1 \cap I_2)$$

(iv)  $I = (\lambda_1, \lambda_2]$  に対して  $B$ -valued function  $\rho(I)$  を

$$\rho(I) = \xi(I) \xi^*(I)$$

と定義すれば,  $\rho(I)$  は *symmetric, non-negative definite, additive interval function* である.

Proposition 3.1 と 3.2 を組合せることによって,  $\xi(I)$ ,  $\xi^*(I)$ ,  $\rho(I)$ ,  $\Phi(r, \lambda)$  の間の関係がわかる.

Proposition 3.3.  $I = (\mu_1, \mu_2]$  とする. また

$$\xi(\mu) = \begin{cases} \xi((0, \mu]) & \text{if } \mu \geq 0, \\ -\xi((\mu, 0]) & \text{if } \mu \leq 0, \end{cases}$$

$$\rho(\mu) = \xi(\mu) \xi^*(\mu)$$

とおく. このとき  $u \in H$  に対して

$$(3.4) \quad [\xi^*(I)u](r) = \int_{\mu_1}^{\mu_2} \phi(r, \mu) \rho(d\mu) u$$

が成立する. また carrier compact で十分円めろかな  $F \in \mathcal{F}$  に対して

$$(3.5) \quad (\xi(I)F)(r) = \int_{\mu_1}^{\mu_2} \rho(d\mu) \left[ \int_0^\infty \phi^*(r, \mu) F(r) dr \right]$$

が成立する.

(3.1)において  $F = \xi^*(I)u$  とおけば, (3.3) を考慮して (3.4) が得られる. また  $F(r) = 0$  for  $r \geq r_0$  として

$$\begin{aligned} (\xi(I)F, u)_H &= (F, \xi^*(I)u)_{\mathcal{F}} = \int_0^{r_0} (F(r), \int_{\mu_1}^{\mu_2} \phi(r, \mu) \rho(d\mu))_H dr \\ &= \int_0^{r_0} \int_{\mu_1}^{\mu_2} (\rho(d\mu) \phi^*(r, \mu) F(r), \mu)_H dr \\ &= \int_{\mu_1}^{\mu_2} (\rho(d\mu) \int_0^{r_0} \phi^*(r, \mu) F(r) dr, u)_H \\ &= \left( \int_{\mu_1}^{\mu_2} \rho(d\mu) \left[ \int_0^\infty \phi^*(r, \mu) F(r) dr \right], u \right)_H \end{aligned}$$

より (3.5) がわかる。(もちろんこれらの積分が存在すること, また積分順序の交換の可能性などは証明することが必要であるが)。

《the generalized Fourier space》を定義するの一段階として次の定義を与える。

Definition 3.3.  $f(\mu), g(\mu)$  を  $[\mu_1, \mu_2]$  で定義された  $H$ -valued functions とする。Definition 3.1 と同様に分割  $\Delta$  を定めて,

$$\lim_{\delta(\Delta) \rightarrow 0} \sum_{i=1}^{n-1} ((p(\eta_{i+1}) - p(\eta_i)) f(\eta_i), g(\eta_i))_H$$

が存在するとき, これを

$$\int_{\mu_1}^{\mu_2} (p(d\mu) f(\mu), g(\mu))_H.$$

でしめすことにする。

$f(\mu), g(\mu)$  が適当にらめらかならこの積分が存在することが示される。

Proposition 3.4  $F \in \mathcal{F}$  が compact carrier をもち, 十分なめらかであるとする。  $I = [\mu_1, \mu_2]$  として

$$(\mathcal{F}_0 F)(\mu) = \int_0^\infty \phi^*(r, \mu) F(r) dr$$

とおけば,

$$(i) \quad (E(I)F)(r) = \int_{\mu_1}^{\mu_2} \phi(r, \mu) \rho(d\mu) (\mathcal{F}_0 F)(\mu)$$

$$(ii) \quad \begin{cases} \|E(I)F\|_g^2 = \int_{\mu_1}^{\mu_2} (\rho(d\mu) (\mathcal{F}_0 F)(\mu), (\mathcal{F}_0 F)(\mu))_H, \\ \|F\|_g^2 = \lim_{\substack{\mu_1 \rightarrow -\infty \\ \mu_2 \rightarrow \infty}} \int_{\mu_1}^{\mu_2} (\rho(d\mu) (\mathcal{F}_0 F)(\mu), (\mathcal{F}_0 F)(\mu))_H \end{cases}$$

$$(iii) \quad L_0 E(I)F(r) = \int_{\mu_1}^{\mu_2} \mu \phi(r, \lambda) \rho(d\mu) (\mathcal{F}_0 F)(\mu).$$

(i) は (3.1) と (3.5) から得られる. (i) を用いて (ii) と (iii) が得られる.

さて,  $\mathbb{R}$  上で定義された  $H$ -valued function  $U(\mu)$  で十分力め  
るかで carrier が compact なものの全体を  $\mathcal{U}$  とする.  $\mathcal{U} \ni U(\mu)$   
に対して

$$\|U\|_p^2 = \int_{\mu_1}^{\mu_2} (\rho(d\mu) U(\mu), U(\mu))_H$$

で  $U$  の norm  $\|U\|_p$  を定義する. ただし  $\text{car } U \subset [\mu_1, \mu_2]$ . このノ  
ルムを用いて  $U, V \in \mathcal{U}$  に対して内積  $(U, V)_p$  を

$$(U, V)_p = \frac{1}{4} \{ (\|U+V\|_p^2 - \|U-V\|_p^2) + i(\|U+iV\|_p^2 - \|U-iV\|_p^2) \}$$

で定義する. このとき  $\mathcal{U}$  は pre-Hilbert space と考えることが  
できる. この pre-Hilbert space  $\mathcal{U}$  を用いて generalized Fourier  
space  $\mathcal{H}_p$  と generalized Fourier transform  $\mathcal{F}$  を次のように定

義する

Definition 3.4. pre-Hilbert space  $\mathcal{U}$  を完備化して得られる Hilbert space を  $L_0$  の generalized Fourier space ということにして,  $\mathcal{H}_p$  であらわす. Proposition 3.4 より  $\mathcal{F}$  は  $\mathcal{H}_p$  に値をもつ有界作用素であるから, これを  $\mathcal{H}$  上に拡張した作用素を  $\mathcal{F}$  であらわし,  $L_0$  の generalized Fourier transform ということにする.  $\mathcal{F}$  は  $\mathcal{H}$  上で定義され  $\mathcal{H}_p$  の中に値をもつ isometric operator である.

$\mathcal{F}^*$  に関しては次のような表現が可能である.

Proposition 3.5.  $U \in \mathcal{U}$  なら

$$(3.6) \quad \mathcal{F}^*U(\nu) = \int_{-\infty}^{\infty} \Phi(\nu, \mu) \rho(d\mu) U(\mu).$$

$L_0$  の固有関数展開は次の形をとる.

Theorem 3.1.  $\mathcal{H}_p$  と  $\mathcal{F}$  を Definition 3.4 の通りとする. このとき,

- (i)  $\mathcal{F}$  は  $\mathcal{H}$  から  $\mathcal{H}_p$  の上への unitary operator である.
- (ii)  $I$  を  $\mathbb{R}$  上の interval とし  $G_I(\mu)$  を  $I$  の特性関数とすると,

$$E(I) = \mathcal{F}^* G_I \mathcal{F}.$$



(ii)  $F \in \mathcal{M}(L_0) \iff \mu \cdot \tilde{F}(F)(\mu) \in \mathcal{H}_p$  そしてこのとき,

$$L_0 F = \tilde{F}^* \mu \cdot \tilde{F} F$$

が成立する.

(i) の証明に関して言えば,  $U \in \mathcal{H}_p$  に対して

$$\|\tilde{F}^* U\|_{\mathcal{H}} = \|U\|_p$$

を示せばよい. そのためには  $U$  が step function の場合を考えればよい.

$$U(\mu) = \begin{cases} u_k & \mu \in [\eta_k, \eta_{k+1}] \quad (k=0, 1, \dots, N-1) \\ 0 & \text{otherwise,} \end{cases}$$

として (3.4) と (3.6) より  $\Delta_k = (\eta_k, \eta_{k+1}]$  として

$$\begin{aligned} \tilde{F}^* U(r) &= \sum_{k=0}^{N-1} \int_{\eta_k}^{\eta_{k+1}} \phi(r, \mu) \rho(d\mu) u_k \\ &= \sum_{k=0}^{N-1} \xi^*(\Delta_k) u_k(r) \end{aligned}$$

であるから, Proposition 3.2 を用いて

$$\begin{aligned} \|\tilde{F}^* U\|_{\mathcal{H}}^2 &= \left( \sum_{k=0}^{N-1} \xi^*(\Delta_k) u_k(\cdot), \sum_{k=0}^{N-1} \xi^*(\Delta_k) u_k(\cdot) \right)_{\mathcal{H}} \\ &= \sum_{k=0}^{N-1} \left( \xi(\Delta_k) \xi^*(\Delta_k) u_k, u_k \right)_{\mathcal{H}} \\ &= \sum_{k=0}^{N-1} \left( \rho(\Delta_k) u_k, u_k \right) = \|U\|_p^2 \end{aligned}$$

となる.

## Bibliography

- [1] V. I. Gorbacük and M. L. Gorbacük, Expansion in Eigenfunctions of a second-order differential Equation with operator coefficient, Dokl. Akad. Nauk SSSR Tom 184 (1969), No. 4. (Soviet Math. Vol 10 (1969), No. 1).
- [2] Willi Jäger, Ein gewöhnlicher Differentialoperator zweiter Ordnung für Funktionen mit Werten in einem Hilbertraum, Math. Z. 113, 68-98.
- [3] K. Kodaira, On singular solutions of second-order differential operators, Sugaku I (1948), 177-191; II (1949), 113-139 (Japanese).
- [4] K. Kodaira, The eigenvalue problem for ordinary differential equations of the second order and Heisenberg's theory of S-matrix, Amer. J. Math. 71 (1949) 921-945.
- [5] F. S. Roze-Beketov, Eigenfunction expansions for infinite system of differential equation in non-selfadjoint and self-adjoint cases, Mat. Sb. 51(93) (1960), 293-342 (Russian).